

城戸千楯『月鉾天井画乃記』考察と翻刻

— 岩城宗廉「源氏五十四帖扇面散図」の制作過程をめぐって

青山英正*

一 はじめに

京都の夏の風物詩とも言える祇園祭の見所の一つに、山鉾巡行がある。中京や下京の各町に伝わる山鉾にはそれぞれ趣向を凝らした装飾が施されており、山鉾によっては中世から近世期にかけて舶来したり制作されたりした彫刻や絵画、織物などが今でも用いられている。

山鉾は現在三十三基あるが、その中でも下京区四条通室町西入ル月鉾町の出す月鉾は、全長、重量とも最大規模を誇る。鉾の頭頂部にそびえ立つ天王座には月読尊を祀り、大屋根には漆黒の八咫鳥が載る。妻飾には金波に兎の彫刻、破風軒裏には円山応挙による金地彩色の草花図がそれぞれ鉾を彩る。また、天水引には天保六年（一八三五）円山応震の下絵による霊獣図刺繍、前掛けには十七世紀インドムガル王朝時代の

「メダリオン緞通」を用いているという。⁽²⁾

さて、その月鉾の小天井には、唐紙貼金地に着色で『源氏物語』に取材した扇面散らし図が描かれている（図1、2）。

着色された長短の板が二枚ずつあり、これらをロの字形に組み合わせ、鉾の天井裏の四周にはめ込む仕組みである（図3）。

この天井画を描いたのは、近世後期の京都の画師岩城宗廉である。そして、この絵が描かれた経緯や各巻の絵柄について、京都在住の本居宣長門和学者城戸千楯（安永七年〔一七七八〕〜弘化二年〔一八四五〕）の記した自筆の卷子本『月鉾天井画乃記』（天保六年〔一八三五〕成立、廣瀬千紗子氏蔵）が現存する。千楯は、錦小路通室町西入天神山町で書肆を営んでいた人物である（ただし天保三年〔一八三二〕に子の千屯に店を譲り、店舗は寺町通蛸薬師下ルに移転していた）。この『月鉾天井画乃記』によれば、月鉾天井画の制作には、千楯自身が関与していた。



図1 月鉾（筆者撮影）



図2 図1黒枠内拡大図（同前）



図3 月鉾の天井裏（同前）

従来、この天井画の作者こそ知られていたが、宗廉の画業や人となりについての検討はされることがなく、彼が千楯の主宰する鐸舎社中の一員であったことも知られていなかった。ましてや、千楯が月鉾天井画の制作に関与していたことなど、『月鉾天井画乃記』の存在によって初めて知り得る事実と言ってよい。

本稿は、東京大学附属総合図書館所蔵の、宗廉自筆の植物図譜『艸木写真集』を中心に、彼の画業や人となりの一端を明らかにした上で、鐸舎社中による歌集『諸社奉納歌集』を手掛かりとして宗廉と千楯の関係

について述べる。次いで『月鉾天井画乃記』を翻刻とともに紹介し、月鉾天井画の制作経緯や描かれた絵柄について解説を加える。そして、こうした作業を通じて、天保期の京都において和学者が果たした役割の一端を明らかにしたいと考えている。

二 岩城宗廉について

岩城宗廉の名は、国会図書館蔵『香道聞覚書』（香道伝書八五）（請求記号 189-187）の巻首題下に「岩城清右衛門宗廉」と見え、通称が清右衛門であったこと、および香道の嗜みがあったらしいことが分かる。また、茶道の堀内家の門人録にも「岩城清右衛門」の名があり、茶道の嗜みもあったとおぼしい。

画業については、『平安人物志』文政十三年（一八三〇）版、および天保九年（一八三八）版の「文人画」の項に岩城文垂、通称清右衛門として掲出される。住所は西洞院通竹屋町北である。さらに、東京大学附属総合図書館の所蔵する宗廉自筆の『艸木写真集』（写本、大本十五冊。第一〜五冊文政五年（一八二二）、第六〜十冊同六年（一八二三）、第十一〜十五冊天保元年（一八三〇）成立（第五、十、十五冊奥書による）。鴉軒文庫、請求記号 T81-220）に寄せられた以下のごとき序文は、より詳しく宗廉の人となりを伝える。同書は毎半葉に一点ずつ植物を描き、諸書からその植物の異名を幾つか列挙した、彩色の植物図譜である。なお、序を寄せた畑維龍は儒者、四徳園金英は狂歌師、恵美長敏は漢詩人、古河順信（恒齋・鸞堂）は大津の儒医である。

○第一冊、文政五年畑維龍序
（前略）岩城文翠、春秋弱冠。在市井之囂、聞香縦情於丹青。写草

木形状、鑑定真贋。性沈静、不好声色之遊。其軀健強、家道不怠。頃模写草木数十品、仔細図写形状、逼真（後略）。（句読点は青山による。以下同じ）。

（大意…岩城文翠は、まだ若者であるが、市井にあって香を聞き、画業に熱心である。草木の形状を写し、その真贋を見極める。性格は沈静であり、品行も正しい。体は壮健で、家業も怠らない。近頃草木数十を模写したが、細かくその形状を写しており、真に迫っている）。

○同右、同年四徳園金英序

（前略）爰に岩城のうし、もろくの華を愛ぬるあまり、道芝の遠近も厭はず根こじて前栽に集め、春かぜを恨み、夏は涼しく水をそそぎ、日の影も覆ひ、秋は夜もすがら眺めて月の光を惜しみ、霜のあした、雪の夕辺は帰り咲かとうたがひ、かつは根の冬枯む事をいたみて筆に六ののりを正し、もくに餘れる花形はさら也、其葉に木に、いつの色を分かちうつして、それの称銘に到る迄、俗語俚語をも元を明らめ、真の名を尋ねて、四の時折々の草木の華も、莊子とやいはん草子とやいはむ、まのあたりひとつの帖とは成ぬ（後略）。

○第六冊、同六年恵美長敏序

（前略）於是巖文翠子、従来有愛草木花実之癖。及能成画、每值一草一木一花一実。輒模写其生、其形容、其濃淡、恰如見其物。実可謂能写。得而今其所集者、不下数百種。更喜後來、為採草探木之幸便乎。而其日々所写月々所藏、遂能至使群品異種算數無量者、殆遍其數以一覽略具也。可概而思耳。然則不啻諸斯之備物産家者流之一考索而、有裨益於世（後略）。

（大意…岩城文翠にはもともと植物を愛する癖があった。絵を描くようになる草木や花実一つ一つを常にじっくりと観察し、その生や様子、濃淡を写し取り、その絵はまるで実物を見るかのようである。実によく描けている。そのコレクションは数百種を下らない。後進が草木を採す指針にもなるだろう。また物産家の役に立つばかりでなく、世にも益するだろう）。

○第十一冊、同十二年古河順信序

（前略）巖文翠、世為平安著姓。其為人也、沈黙清雅、好文学、巧書画、常好為草木之写真。漢種及吾邦希有之草木、聞在某園中、即往而写之。恰真蜂蠶窺之蚊蝶飛來。觀人莫不歎焉。且得一草一木必就神農本經及諸書、而正其名（後略）。

（大意…岩城文翠は名家の者である。人となりは寡黙で清雅、学問を好み書画に巧みで、草木を写し取ることを常に好む。珍しい草木が某の庭にあると聞けばすぐにそこに行つて写す。あたかも蜂やサソリが蝶の飛んで来るのを待つかのようなものである。また草木を知ると必ず『神農本經』や諸書で正しい名称を確認する）。

もとより序文の言を額面通り受け取るわけにはいかないものの、宗廉が香道ほか諸道の嗜みがあり、草木を愛しその写生を得意としていた点は、周囲の宗廉評の一致するところであった。実際、この『艸木写真集』を繙くと、たとえば福寿草は、包葉状の葉に包まれて先端に一つの花を付ける様子、伸びて三回羽状複葉を互生する様子などが正確に観察され、かつ花卉、茎、葉の質感を描き分けていることがうかがえる（図4）。

なお、宗廉と城戸千楯が親交を結んでいたことは、後述の『月鉞天井画乃記』において、千楯が「おのれもしたしうす」と記していることか



図4『艸木写真集』（東京大学附属総合図書館蔵）

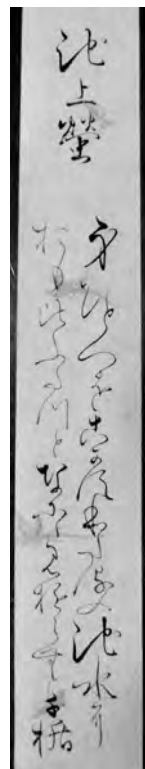
知られるが、宗廉が千楯の主宰する鐸舎社中の一員でもあったことは、千楯が編んで京都の諸社に奉納した、『諸社奉納歌集』松尾社之部（天保六年九月序、天保九年跋刊）、および梅宮社之部（天保九年二月跋刊）に、「岩城清右衛門 源宗廉」という名が見え、実際、それぞれの歌集に七首の歌を寄せていることから確かめられる。和歌は千楯に就いて学んだのであろう。

三 『月鉾天井画乃記』について

三一一 書誌情報

○所蔵 廣瀬千紗子氏。

図5 千楯自筆短冊（筆者架蔵）



- 表紙 原装。縦三一・二×横二一・九糎。海松色唐花地に鴛鴦および獅子丸散らし文様緞子表紙。
- 外題 なし。
- 見返し 金銀箔砂子散らし。
- 料紙 楮紙。蝶・鳥・草花散らし文様（丁字色摺）。裏面雲母摺。
- 内題 「月鉾天井画乃記」。
- 本紙 十六枚。横七二九・五糎。
- 行数 一紙あたり十五行。
- 奥書 「天保の六とせといふとしのさつきついたち／かきつ／城戸 範次大江千楯」。
- 裏見返し 横十四・八糎。
- その他 城戸千楯自筆。なお、千楯自筆短冊の中には、該書の料紙と同じ板木で摺り出した文様のものが現存する（図5）。このことから、該書の料紙は千楯自身が詠えたと推測される。

三一二 制作経緯

『月鉾天井画乃記』十八行目から四十一行目の記述をもとに、該書の制作経緯を整理すると次のようになる。

祇園祭を見物しようと上京する人が多いため、山鉾を出す町々では互

いに競い合い、金に糸目をつけずに最上のもので飾り立てていた。月鉾も、出来る限りの装飾を施していたが、今年それをさらに良くしようと言ふことになり、町内の人々が尽力して色々と新調したが、屋形の天井画については、岩城宗廉が長年絵を描くことを好んでいたのに彼に依頼した。宗廉は『源氏物語』の各巻に取材して描こうと思ひ、私千楯も彼と親しくしていた縁で、この企画に加わった。ただ、世に流布する古画では面白くなく、新たなものを作る心づもりで『源氏』を読み進めて見たが、同じような絵ばかりになってしまふことも多く、また巻の順序も前後しないようにと考えると、花鳥草木の取り合わせが面白くない。あれやこれやと考えながら、二人でこれは思った以上に煩わしいことであるよと言ひ合う始末であった。そこで、いっそのこと順序など多少前後してもどうせ絵空事なのだからと、また原典に必ずしも即していなくとも、配色やら何やらざっとみてまあこれでいいだろうというところに落ち着いた。

千楯は、おおむね右のようなことを述べている。また、末尾近くの二〇七行目から二一一行目の記述によれば、制作に取りかかったのは「去年」、すなわち天保五年のことであり、それ以来静かな一間を清め、尻くめ久米繩、すなわち注連繩を引きめぐらせて、昼夜を分かたず描き続けたともいう。

この『天井画乃記』が記された年、すなわち天保六年は、先述の通り月鉾の天水引として円山応震の下絵による霊獣図刺繍が制作された年であり、他にも金波に兎の妻飾、木彫りの鴉の屋根飾、蝙蝠桃靈芝文様の木彫の角飾房掛具、牡丹唐草丸文様の見送裾飾金具がいずれも同年の制作である。⁽⁴⁾ こうした事実と、右に見た『月鉾天井画乃記』の記述とを照らし合わせると、以下のような制作経緯が見えてくる。すなわち、天保

六年の祇園祭に向けて月鉾の装飾を新調しようという気運が町内で高まり、その一環として、その前年の天保五年、宗廉に天井画制作の依頼があった。そして、宗廉は交際のあった（おそらく和学の師であった）千楯に相談し、『源氏物語』の各巻を題材にした天井画制作が始まったのである。

絵柄も古画に倣うのではなく、どうやら千楯と宗廉とで話し合い、『源氏』を読み返しながら考えていったらしい。扇面散らし画という趣向を選んだのは、該書一九三行目から二〇七行目までの記述によれば、月鉾町のあたりを扇座町とも呼ぶため、それを表そうとしたのであり、また、汗もしたたる六月の暑さに風を恋う人たちが涼を感じるようにと考えたためでもあるという。唐画風の獣や空想による鬼神のような耳目を驚かす絵ではなく、見慣れた山のたたずまい、水の流れ、折々の植物といった親しみやすい風景を描いたのも、その方が神を涼しい心地にさせ、人々も愛着を感じるだろうと考えたからであった。

このように、千楯による『月鉾天井画乃記』は、従来知られていなかった月鉾天井画制作の経緯を具体的に明らかにするばかりでなく、制作の方針やその意図についても詳らかに記している点で貴重である。千楯は、天狗や幽冥界などの存在を説いた平田篤胤に批判的であったことでは知られる。千楯にとって、和学は、あくまでも現実に即した学問たるべきであり、神への信仰もまた日常生活の延長としてあった。そして、こうした千楯の学問的姿勢は、月鉾天井画の制作方針にも反映していたと言えよう。

三一三 天井画の絵柄について

『月鉾天井画乃記』は、四十二行目から一九三行目にかけて、扇面画



図6 源氏五十四帖扇面散図（所蔵：公益財団法人月鉾保存会、写真提供：公益財団法人祇園祭山鉾連合会）
 上段：㉘行幸から㉙夕霧まで
 下段：①桐壺から①花散里まで

一点一点についての説明が記されている。扇は全部で五十五面あり、『源氏物語』の「雲隠」巻を含む各巻に対応している。

それぞれの絵柄は、次に掲げた「絵柄一覧」の通りである。丸数字は『源氏物語』の帖数を表し、それに続けて『源氏物語』巻名、そして描かれている絵柄を簡潔に記した。宗廉がなぜその絵柄を選んだのかについては『月鉾天井画乃記』に記されているので、翻刻を適宜参照されたいが、㉘雲隠巻の趣向については簡単な説明を加えておきたい。同巻は周知のように巻名のみが伝わり、本文が伝存しない。そこで、宗廉はたんだ扇一本のみを描いた。これについて千楯は、「げに、いふことなれば、またかくこともなきを、かく心をえられたる、中々におかし」と評している。

図6と7には、小天井から取り外した状態の天井画の写真を掲げた。四本の板のそれぞれ右から巻の順に扇面画が並んでおり、これらを実際に組み上げると、反時計回りに巻数が進むことになるが、前節で紹介した千楯の言の通り、絵柄や配色のバランスを考慮して多少前後している箇所もある。なお、総じて人物画よりも草木画が多いのは、先述した宗廉の得意分野を生かしたのかもしれない。実際、草木を描いたものの方が精彩に富んでいるような印象を受ける。

○絵柄一覧

- ① 桐壺 萩の花 ② 箒木 遣り水のある家と小柴垣 ③ 空蟬
- 碁盤 ④ 夕顔 夕顔 ⑤ 若紫 鳥籠 ⑥ 末摘花 末摘花
- ⑦ 紅葉賀 紅葉の木と幕と舞（青海波） ⑧ 花宴 月と桜 ⑨
- 葵 双葉葵 ⑩ 賢木 賢木と木綿 ⑪ 花散里 小車とほととぎ
- す ⑫ 須磨 海と淡路島 ⑬ 明石 貴人と馬と倍人 ⑭ 澗標



図7 源氏五十四帖扇面散図 (所蔵および写真提供：同前)

上段：⑨御法から⑤夢浮橋まで

下段：⑫須磨から⑳野分まで

- 霽標 ⑮蓬生 蓬生 ⑯閑屋 杉の群立ち ⑰絵合 卷物二卷
 ⑱松風 鶴舟 ⑲薄雲 日の入る峰と雲 ⑳朝顔 朝顔 ㉑
 乙女 箱の蓋と五葉の枝 ㉒玉鬘 二本の杉 ㉓初音 梅が枝
 と鶯 ㉔胡蝶 胡蝶舞 ㉕螢 螢 ㉖常夏 鮎 ㉗篝火
 琴 ㉘野分 靡き伏す秋草 ㉙行幸 松と雪 ㉚藤袴 藤袴
 ⑳真木柱 竹垣と山吹 ㉛梅枝 香盆と香箸 ㉜藤裏葉 藤の
 花 ㉝若菜上 若菜と籠 ㉞若菜下 御簾と女君 ㉟柏木
 柏 ㊱横笛 横笛 ㊲鈴虫 築地と草花 ㊳夕霧 秋の山里
 ㊴御法 陵王の舞楽 ㊵幻 菊と着せ綿 ㊶雲隠 たたんだ扇
 ㊷匂宮 賭弓 ㊸紅梅 紅梅 ㊹竹河 流れとうち橋 ㊺橘
 ㊻宇治橋 ㊼椎本 釣殿 ㊽揚卷 水魚と木葉 ㊾早蕨
 蕨 ㊿宿木 蔦紅葉 ㊽東屋 四阿 ㊽浮舟 小船 ㊽蜻
 蛉 蜻蛉 ㊽手習 机と筆硯 ㊽夢浮橋 山里

四 おわりに

以上、本稿では、城戸千楯『月鉾天井画乃記』をめぐって、月鉾天井画「源氏五十四帖扇面散図」を描いた岩城宗廉の画業と人となり、千楯との関係や天井画制作の経緯などについて検討してきた。そして、宗廉が植物を愛好し、草木画を得意としていたこと、香道や和歌、そしておそらくは茶道の嗜みもあり、特に和歌については千楯の主宰する鐸舎社中の一員であったこと、その縁で、天保五年から千楯と相談しながら『源氏物語』に取材した月鉾天井画の制作に取りかかり、翌六年に完成したことなどを明らかにした。また、月鉾には天保六年に新調された装飾品が複数見られるという事実と、『月鉾天井画乃記』の記述から、この年に月鉾の装飾を新調する気運が町内で高まり、宗廉に天井画の制作依頼があったのはその一環と考えられることも指摘した。

千楯の住んでいた錦小路通室町西入天神山町は月鉾町にほど近く、霰天神山という山鉾を出す町でもある。千楯は、自身も長年祇園祭に深く関わってきた京都の町衆の一人として、かつ『平安人物志』にも掲載され当時名を知られた和学者として、自らの培った日本古典に関する知識を、祭の山鉾装飾の制作に生かしたのである。

附 『月鉾天井画乃記』翻刻

○凡例

- ・読みやすさを考え、私に濁点および句読点を付した。
- ・仮名は平仮名に統一した。

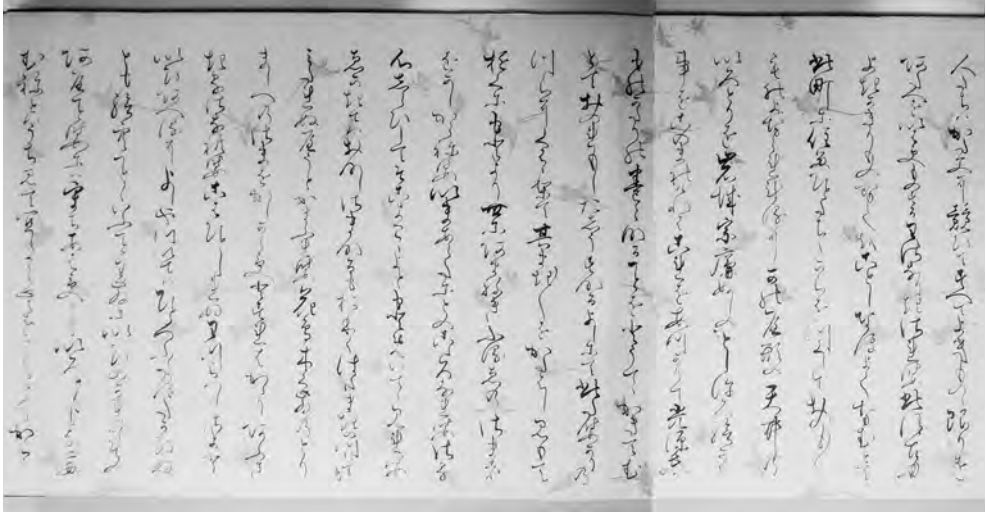
- ・漢字は原則として通行の字体に統一した。
- ・行末のアラビア数字は、原文の行数を表す。

月鉾天井画の記



○翻刻
月鉾天井画乃記

目には見て、手にはとられぬ月をしも名に
おへる鉾といふは、わがみやこ室町よりはにし、
四條の大路にありて、年毎のみな月なぬか、
祇園の大神の御祭りの神むかへの山鉾とて、
くさくさあるがなかのひとつにして、いつの頃よりか
もちつたへけむ、いとあがりたる世より、いまも
かはらずものするわざにぞありける。其やうは、かの
月といふは、いと長き棹の上におきて、なからば
かりに神とたふふるくゞつをいつき、しもつかたに
家形をくみたて、あやにしき目のかゞやくからの
やまとのおりものもてつゝみて、児かぶるなどいふ
わらはをまへにすゑて舞ひせさせ、笛、鉦、太鼓
もてはやしたてつゝ、車をかけて此おほぢをひむがしへ、
京極をみなみへ、松原といふをにしへとひきて、もとの
まちへとかへるなりけり。すべて、此ほこのほかなるも、
とりくにすがたおもぶきのかはりありて、往昔
よりさだまりて、おこなふわざもくさくありとなむ
きくなる。かゝれば、とほきちかき国々より、これ見む
とてつどひのぼる人おほかなれば、山鉾いたす町々の



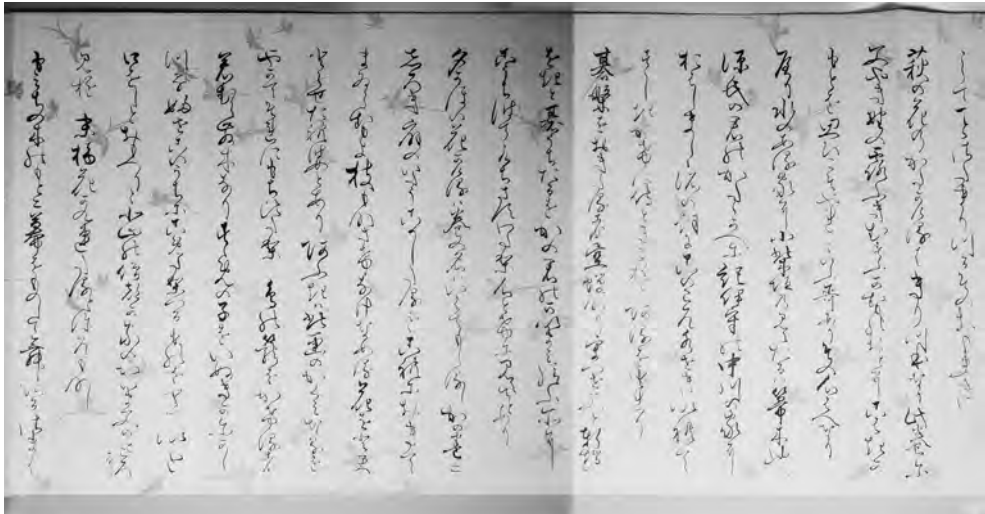
人たちは、かたみに競ひて、すべてよきものゝ限りを
あたへをいはずものするわざなりき。されば此ほこも、
よきかぎりものせしを、ことしなほよくせむとて、
此町に住るひとたちゝからをつくして、おのもく
ものよせられけるに、かの屋形の天井の

いろどりを、岩城宗廉ぬしの、としごろ絵かく
事をこのまれければ、これをあづかりて、光源氏の
ものがたりの巻々なることを、とうでゝかきてむ
とて、おのれもしたしうすなるよしにて、此たばかりの

つらにくはゝりて、其まきくをかたはし見もて
ゆくに、もとより世にあまねきふるゑのさまは
をかしからねば、いまあらたにとのこゝるなれば、さる
心しらひして、そこよこゝよともとめいで、見れば、

ゑかきてはおなじさまなるもおほく、はたまきのついでも
みだれぬやうとかまふれば、花鳥木くさのとり
まじへのさまをかしからず。とすればかゝり、あふさ
きるさなれば、こはひとしれぬわづらはしさよと

いひあへるに、よしやついでは、ひとつふたつたがひぬ
とも、絵空ごとゝいふことわざにいひのがれて、その
あやことばにはうちあはずとも、いろどりもなにも、
むねとはうち見て宜しからむをこそとて、からう



じてことさだまりつるそのおもぶき。

萩の花のかたかけるはきりつぼなり。此巻に、

みやぎ野の露ふきむすぶかぜのおとにこはぎが

もとを思ひこそやれ、といふ哥あり。その心ばへなり。

やり水のある家に、小柴垣の見えたるは帚木也。

源氏の君の、かたゝがへに、紀伊守の中川の家に

おはしましゝ所の詞に、このごろ水せきいれて、

すゞしきかげに侍ときこゆ、とあるをとれり。

碁槃をおきたるは空蟬なり。うつせみと軒端の

をぎと碁うちたるを、かの君のかいまみ給ふ所に、

ごうちはてゝけちさすわたり、心とげに見えて、とあり。

夕がほの花かけるは、巻の名はいはでもしるし。かの巻に、

しろき扇のいたうこがしたるを、これにおきて

まゐらせよ、枝もなさけなげなめる花を、とて

とらせたれば、とあり。あふぎは此画のかくみなるを、

やがてそれにもちひたり。鳥の籠をかけるは、

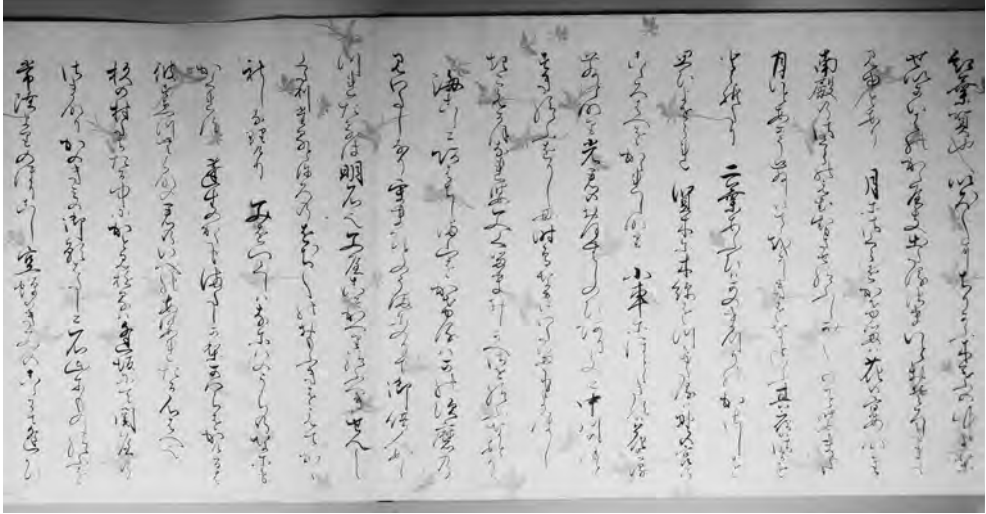
若むらさきなり。すゞめの子をいぬきがにがし

つる、ふせごのうちにこめたりつるものを、とて、いと

口をしておもへり、と、北山の僧都が家のかいまみのところに

見ゆ。末摘花、かくれたるところもなし。

もみぢの木のもとに幕をものして、舞あるさまは、



紅葉賀也。いろ／＼にちりかふ木葉の中より、
せいがいのはのかゞやき出たるさま、いとおそろしきまで
見ゆ、とあり。月にさくらをかけるは、花の宴なり。

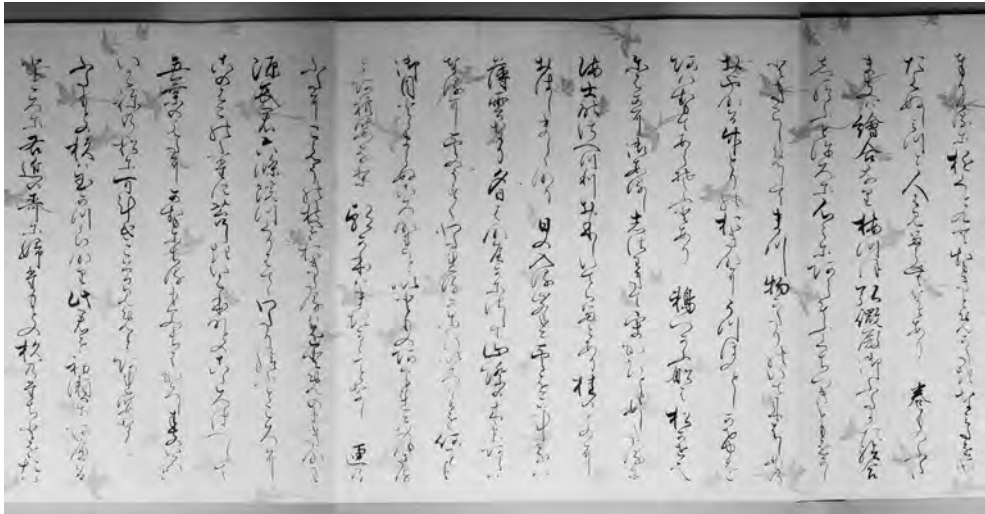
南殿のさくらのえむせさせ給ふしか／＼のことは、また、
月いとあかうさしいでゝをかしきを、などいふ其夜のさまを
とられたり。二葉あふひは、かのまつりのかざしを

思ひよせられ、賢木に木綿をつけたるは、野の宮の
こゝろばへをかゝれしなり。小車にほとゝぎすは、花ちる
さとなり。光君のおほむしのびありきと、中川のほど
すぎ給ふをりしも、時鳥なきわたるもよほし

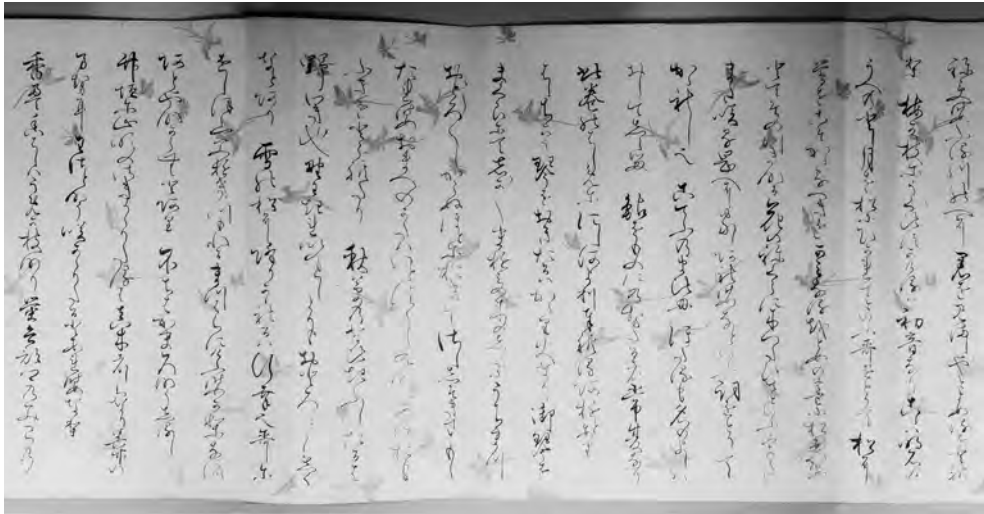
きこえがほなれば、みくるまおしかへさせ給ふ、などあり。

海ごしに、あはぢしま山をかけるは、かの須磨の

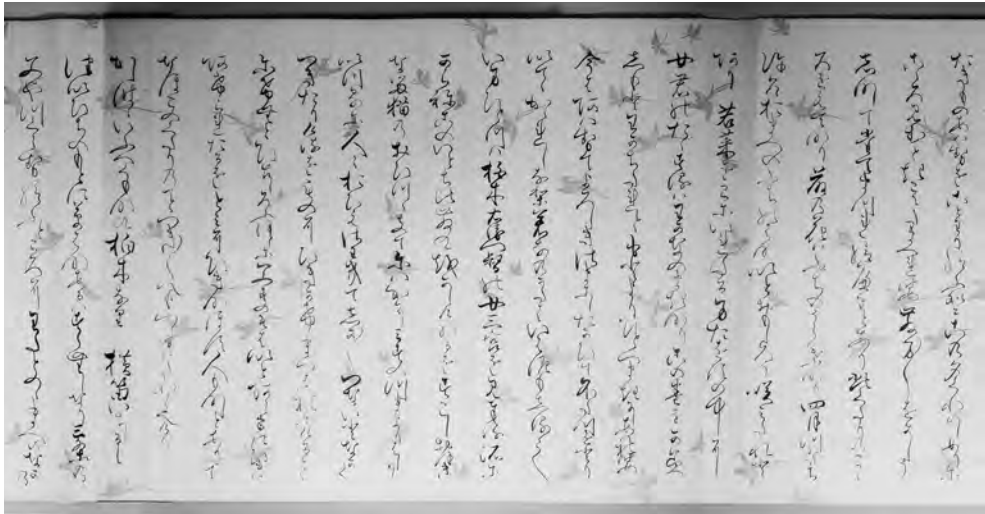
見わたしなり。うまひとのうまにのりて、御倍人めし
つれたるは、明石也。みやこにかへり給ふべきせんじ
くだりたるところの、をち／＼のおもぶきをえて、かゝ
れしなりけり。みをつくしは、なにはのうらの、なにも
かくれず。蓬生のかたも、またしかり。かはらをかけるは、
彼すゑつむはなの君のいへの、あばれたる心ばへ也。
杉の村だちたる中にかと見ゆるは、逢坂にて、関屋の
さまなり。かのきみの御願はたしに、石山にものし給ふを、
常陸よりのぼりこし空蟬のきみの、こゝにて逢ひ



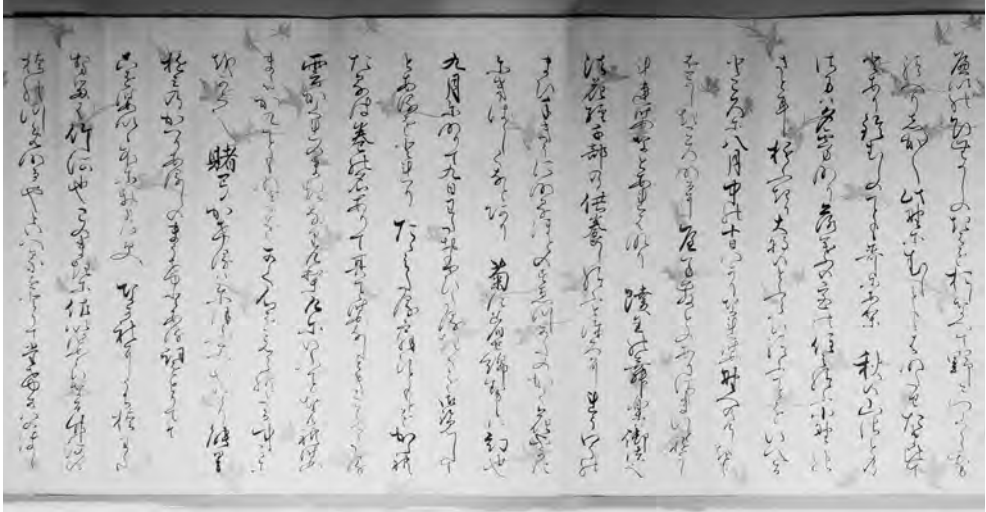
奉りけるに、ゆくたくとせきとめがたきなみだをや
 たえぬしみづと人は見るらむ、などあり。巻ものふた
 まきは、絵合なり。梅つぼ、弘徽殿、御ふたかた、絵合
 し給ふところに、心々にあらそふくちつきども、をかし
 ときこしめして、まづ物がたりのいで来はじめの
 おやなる竹とりのおきなな、うつほのとしかげを
 あはせてあらそふ、とあり。鶴つかふ船は、松かぜ也。
 にはかに御あるじし、さわぎて、うがひどもめしたるに、
 海士のさへづりおほしいでらる、とあり。桂のとのに
 おはしましゝなり。日の入る峯と雲をかけるは、
 薄雲なり。夕日はなやかにさして、山際の木末あらは
 なるに、雲のうすくわたれるが、にびいるなるを、何ごとも
 御目とゞまらぬころなれど、いとものあはれにおぼさる、
 とあればなり。朝がほは、まぎるゝことなし。匣の
 ふたに、ごえうの枝をおきたるは、をとめのまきなり。
 源氏君、六條院づくりはてゝ、わたり給ふところに、
 このはこのふたに、苔しき、いはほなどのこゝろばへして、
 五葉のえだに、かぜにちるもみぢはかるし春のいろを
 いはねの松にかけてこそ見め、とあればなり。
 ふたもとの杉は、玉かづらなり。此君を初瀬にあへる
 ところに、右近の哥に、ふたもとの杉のたちどをたづ



ねずばふる川のべに君を見ましや、とよめるをとれり。梅が枝にうぐひすかけるは、初音なり。こゝは、明石のうへの、とし月を松にひかれて、といふ哥をとりて、松に鶯をこそかゝるべきを、かみなるをとめの巻に、松あればとて、そのつきなる、花のねぐらに木づたひて、といふうた、また、咲る岡べに家しあれば、などいふ詞をとりてかゝれし也。こてふのまひも、ほたるも、名のよしはおしてしらす。鮎をものにのせたるは、常夏なり。此巻のはじめに、にし河より奉れるあゆ、とあり。はしちかう琴をおきたるは、かゞり火なり。御琴をまくらにてしかく、まゆみの木のしたに、うちまつ、おどろくしからぬほどにおきて、さししぞきて、ともしたれば、おまへのかたは、いとすゞしく、などあるおもぶきをとられたり。秋草のなびきふしたるは、野わき也。野わき、れいのとしよりもおどろくしく、などあり。雪の松に降りかゝれるは、行幸也。歌に、をしほ山みゆきつもれるまつばらにけふばかりなるあとやなからむ、とあり。ふぢばかま、ろなうしるし。竹垣に山吹のさきかゝりたるは、真木ばしらなり。呉竹のませに、わざとなう咲かゝりたる、とあればなり。香盈、香ばしは、うめが枝なり。螢兵部卿のみこの、

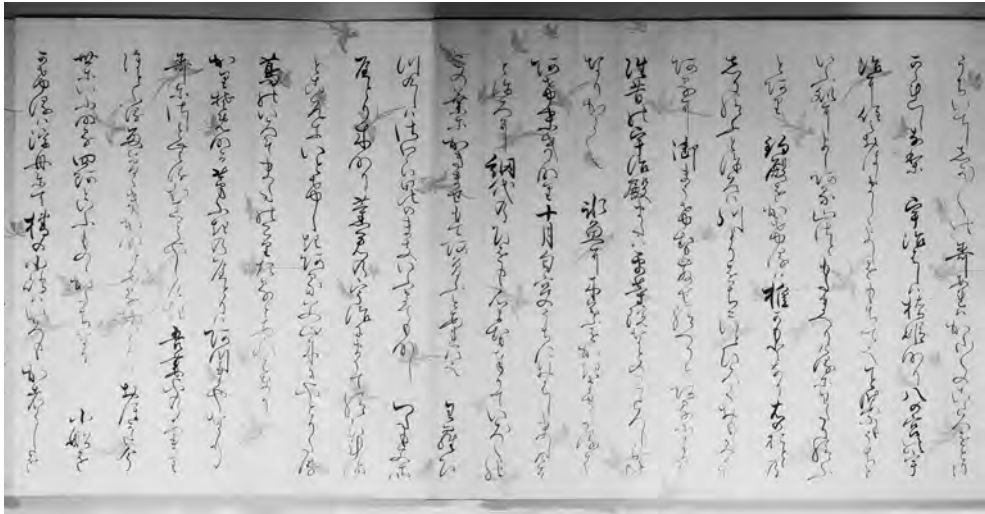


たきものあはせをことわり給ふ処に、この夕ぐれのしめりに
 こゝろ見む、ときこえたまへれば、さまんをかしう
 しなして、たてまつれ給へり、とあり。此くだりのこゝ
 ろをえてなり。藤の花は、ふぢのうら葉なり。四月ついたち
 ごろ、おまへのふぢのはな、いとおもしろう咲みだれ、と
 あり。若菜をこにいれたる、またをすの中に
 女君のたゝするは、わかなのまきなり。この巻をかみ
 しもとわかちたれど、もとよりひとつまきにしあれば、
 今はあはせてよろしきさまにしたがひて、ふたつをとり
 いでゝかゝれしなり。若なのかたは、いはでもしるし。
 いまひとつは、柏木右衛門督の、女三宮を見奉る所に、
 からねこの、いとちひさくをかしげなるを、すこしおほき
 なる猫の、おひつゞきて、にはかに、みすのつまよりはしり
 いづるに、人々おびえさわぎてしかく、つないとながく
 つきたりけるを、ものにひきかけ、まつはれにけるを、
 にげむ、と、ひこじろふほどに、みすのそば、いとあらはにひき
 あげられたるを、とみにひきなほす人もなし、とありて、
 なほこのくだりのこと、つぎへもつゞきたれば也けり。
 かしは、いふべくもなく柏木なり。横笛いちじるし。
 ついひぢのもとに、草ばなあるは、すゞむしなり。三条の
 みやつくらせ給ふところに、わたどのゝまへの、なかの



へいの、ひむがしのきはを、おしなべて野につくらせ
給へりしかく、此野に、むしどもはなたせたまひて、
とあり。鈴むしのことも哥にあり。秋の山ざとの
さまは、夕霧なり。落葉の宮の住み給ふ小野の
さに、ゆふぎり大將のとぶらひ給ふことをいへる
ところに、八月中の十日ばかりなれば、野へのけしきも
をかききころなるに、やまざとのありさまいとゆかし
ければ、などあればなり。陵王の舞樂は、御法也。

法花経千部の供養し給ふところに、れうわうの
まひて、きうになるほどの、すゑつかたのがく、花やかに、
にぎはしく、などあり。菊に、着せ綿せしは、幻也。
九月になりて、九日わたおほひたるきくを御覽じて、
とあるをとれり。たゝみたる扇ひとつとをかくれ
たるは、巻の名ありて其ことばなしときこえたる、
雲がくれのまきなりけり。げに、いふことなれば、
またかくこともなきを、かく心をえられたる、中々に
おかし。賭弓かけるは、にほふみやなり。のり
ゆみのかへりあるじのまうけ、とある詞をとりてぞ。
こをばい、ゝふにおよばず。ながれにうち橋わた
せるは、竹河也。このまきに、さいばらなる竹河の、
橋のつめなるや、といへるをとりて、たけかはのはし



うちいでししかく、の哥あれば、かたぐのころをとりて

かゝれしなり。宇治ばしは、橋姫なり。八の宮の宇

治に住みおはしまし、よしをもちて也。ことばにも、うぢと

いふ処に、よしある山ざともたまへりけるに、わたり給ふ、

とあり。釣殿をかけるは、椎がもとなり。右のおとの

しり給ふところは、川よりをちに、いとひろくおもしろくて

あるに、御まうけさせ給へり、とあるによりて、

往昔の宇治殿、または平等院などのころしらひ

なりかし。氷魚に木葉をかきませたるは、

あげまきなり。十月、匂宮の、うちにおはしましける

ところに、網代のひをも心よせ奉りて、いろ／＼の

この葉にかきませもてあそぶ、とあれば也。わらび

づくしは、さわらびのまき、いふまでもなし。つたもみぢは

やどり木なり。薫君の、宇治にまうで給ひける

ところに、いとけしきあるみ山木にやどりたる、

鳶のいろぞまだのこりたる、とあればなり。

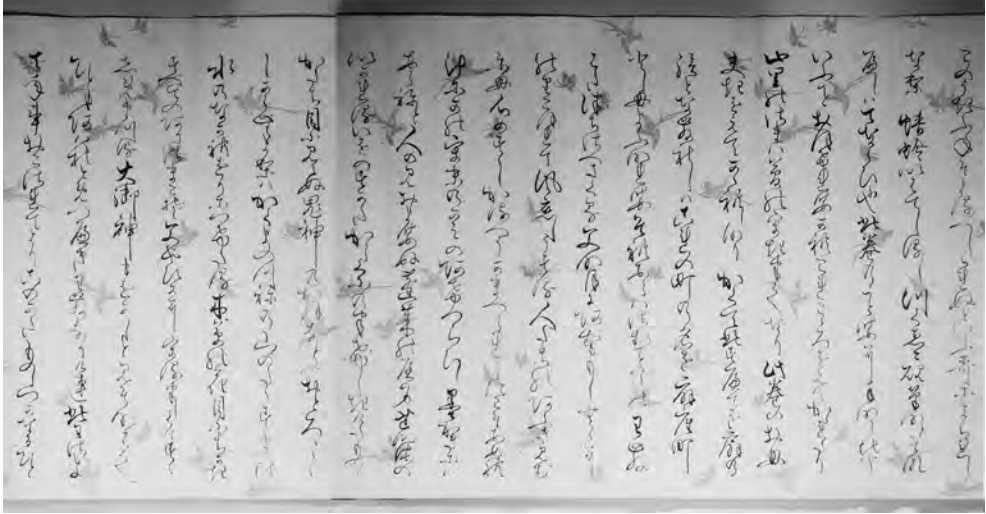
かりそめなる茅ぶきのやどりは、あづまやなり。

哥に、さしとむるむぐらやしげき吾妻やのあまり

ほどふる雨そゝぎかな、とあるをとりて、おほかた今

世にいふなる、四阿といふものゝかたちなり。小船を

かけるは浮舟にて、楯の小嶋はいろもかはらじを



このうきふねぞよるべしられぬ、といふ哥によられし
なり。蜻蛉、いはでしるし。つくゑに硯筆などそな
へしは、てならひ也。此巻のことはに、手ならひと
いふことおほければ、かれこれこゝろをえて、かゝれたり。

山里のさまは、夢のうきはしなり。此巻のおも
ぶきをえてかゝれしなり。かくて、此すべてを扇の
絵となされしは、これの町の名を、扇座町

としもよぶなれば、それあらはさむとてのわざ、
はた、つちさへさくるみな月に、あせもしとゞに
のりこぼれて、風恋しうする人たちのあふぎ見む

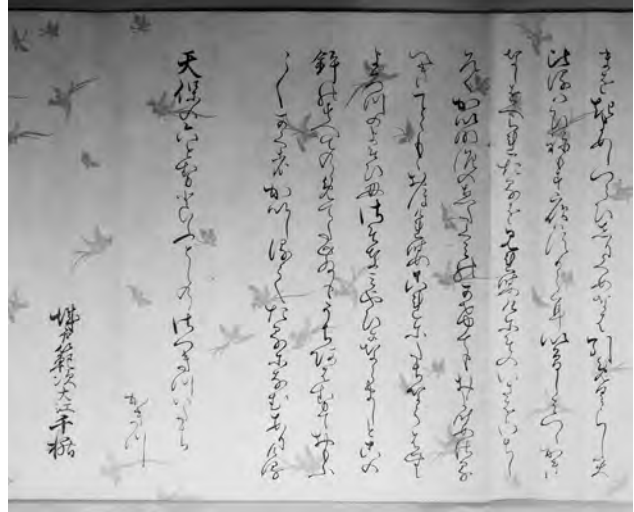
にも、心のすゞしかるべう、かまへられしにこそあめれ。
げに、かのうまのかみのあげつらひし墨がきには
あらねど、人の見およばぬ蓬萊のやま、荒海の
いかれるいをのすがた、からくにはげしきけだもの、

かたち、目にみえぬ鬼神のかほなどの、おどろく
しからむよりは、かくよのつねの山のたゝずまひ、
水のながれ、をりにつけたる木草の花、目にちかき

すべてのありさまこそ、みやびかにうるはしくて、すゞ
しめまつる大御神も、をかしと見そなはし、

ひとあはれとめづべきわざなりけれ。此わざよ、
去年事おこされてよりこのかた、ものしづかなるひと

※本稿を成すにあたっては、『月鉾天井画乃記』のご所蔵者である廣瀬千紗子氏に格別のご高配とご助言を賜った。また、京都文化博物館学芸員の橋本章氏のご高配により、天井画「源氏五十四帖扇面散図」の写真使用について、公益財団法人祇園祭山鉾連合会のご快諾を賜った。天井画のご所蔵者である公益財団法人月鉾保存会と併せ、いずれの方々にも心より感謝申し上げます。



城戸範次大江千楯

まをきよめしつらひ、しりくめなは引めぐらして、
ひるはひねもす、夜はすがらに、いそしみつゝかき
なしをへられたるを見れば、げにそのいさをいちじ
ろく、かいなでのゑたくみの、かけてもおよばざる
べきことども、おほければ、これにたちならはむ
よろづのよそひも、さぞなみやびにならましと、この
鉾のすべてのためたさも、うちあはせておもふ
て、かくはかいしるしたるになむありける。

天保の六とせといふとしのさつきついたち

かきつ

註

- (1) 京都文化博物館「祇園祭——月鉾の名宝」展リーフレット(二〇一六年)。
- (2) 公益財団法人月鉾保存会HP: <http://www.tsudihoko.or.jp>。二〇一九年一月二日閲覧。
- (3) 『堀内門人録』(『日本庶民文化史料集成10』三一書房、一九七六年)天保五年四月十五日条。
- (4) 前掲注1。